大人の童話
幸せのレシピ

文・小原麻由美
絵・小島加奈子

月夜のティールーム

湖のほとりに小さなティールームがありました。丸いテーブルと椅子だけがあるティールームです。お客さんはいつも一組だけ。お店は満月の日にしか開店しません。それに飲み物のカップやお菓子はお客さんが自分で持って来なくてはなりませんでした。それでも一組のお客さんはすぐ予約で埋まってしまいます。

群青色の空が広がる夕暮れ、ティールームのドアベルが鳴りました。

「こんばんは」

初老の夫婦がお店にやってきました。

「いらっしゃいませ。お待ちしていました」

ティールームの店主はにっこり笑って、ひげを動かしました。そして、夫婦を湖が見えるティールームへ招き入れました。

「もう少しすると満月が昇り、美しい光の道が湖に広がります。それまでに飲み物とお菓子の用意をしてくださいね」

店主はそう言うと、ピョンと飛んでどこかへ行ってしまいました。

夫婦は大きな籠バッグの中から、ウサギの描かれたガラスのコップを取り出しました。白いお皿にチョコレートとハート型の手作りのクッキーを並べました。

「お客様が会いたい人は、小さなお子様のようですね。この椅子をどうぞ」

店主はそう言って、子ども用の椅子を持ってきてくれました。

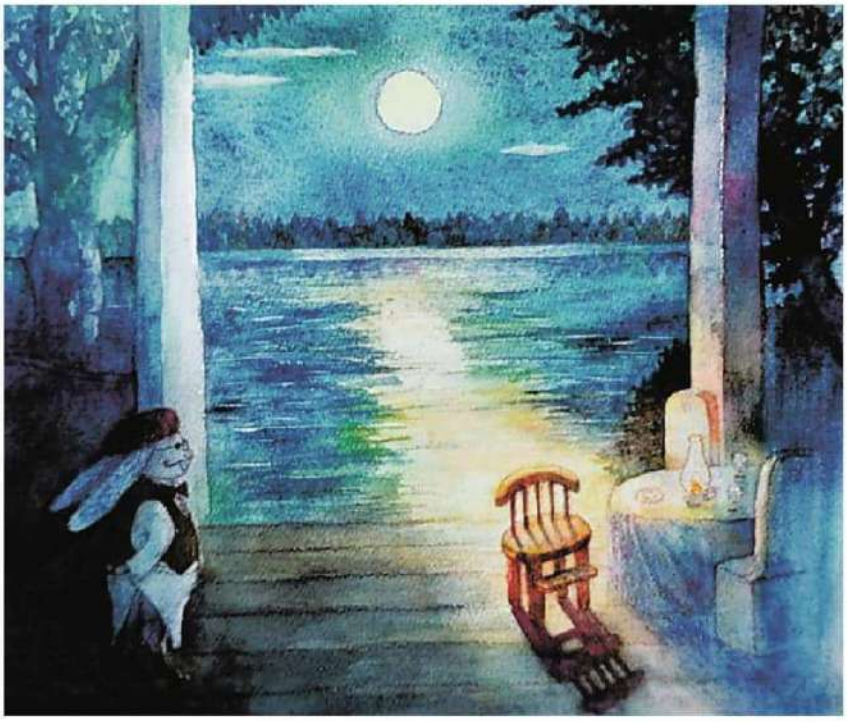
「はい、七歳の女の子です」

夫婦は嬉しそうに笑って、頭を下げました。

「そろそろですよ。短い時間ですが楽しんでくださいね」

店主はピョンピョン飛んで、またどこかへ行ってしまいました。

鉄紺色の空に満月が昇り、湖面に月の光が丸く映りこみました。



子ども用の椅子に、小さな女の子が座っていました。

「茉莉ちゃん！」

夫婦は立ち上がって、叫びました。

「お父さんとお母さん？」

女の子は疑いの目で2人のことを見つめています。それもそのはずです。茉莉ちゃんが病気で亡くなってから、30年もの年月が流れていたのですから……。

「私たち、年を取ったでしょう？　茉莉はあのときのまま、とっても可愛いわよ」

お母さんが苦笑いをしながら、ガラスのコップにジュースを注ぎ入れました。

「大切にしていたウサギさんのコップよ。覚えている？」

「うん、覚えているよ。お誕生日のプレゼントで買ってもらったコップだもん！」

茉莉ちゃんは、懐かしそうにコップを触りながら、ジュースをゴクゴク飲みました。

「クッキーも食べていい？」

「もちろん！　大好物のチョコレートもたくさん持ってきたよ」

お父さんが、お菓子のお皿を茉莉ちゃんの方へ近づけました。

「これ全部食べてもいいの？」

「もちろん！　全部、茉莉のために持ってきたんだよ」

お父さんが茉莉ちゃんの頭をなでながら、言いました。

「わーい！　いただきます」

茉莉ちゃんは、お菓子を口いっぱいにほおばりました。

「あの頃は食べたいものも食べられず、入退院を繰り返していたから……」

お母さんが涙声で呟きました。

「泣かないで。せっかく茉莉と三人で過ごせる時間なんだから、笑顔でいなくちゃ」

お父さんがお母さんの背中を優しくさすりました。

それから親子三人は時間が経つのも忘れて、楽しかった思い出話をたくさんしました。

月が頭上に上ってゆくとともに辺りはだんだん明るくなり、同時に湖面に映りこむ月はぼんやりとし始めました。瓶の中にあったジュースも、お皿の上のお菓子もすっかりなくなりました。

『お父さん、お母さん、ありがとう』

茉莉ちゃんの声がティールームに響き渡り、子ども用の椅子がカタリと音を立てました。

月は森に落ちて見えなくなり、茉莉ちゃんの姿も消えてなくなっていました。

（終）

文 小原麻由美
1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」（PHP研究所）、「キュンすけのおくりもの」（三恵社）がある。

絵 小島加奈子
1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。